

語林類葉

まみむ

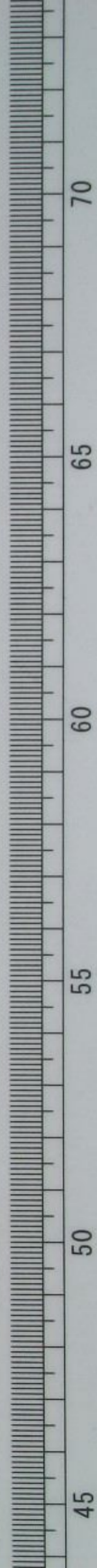
十六

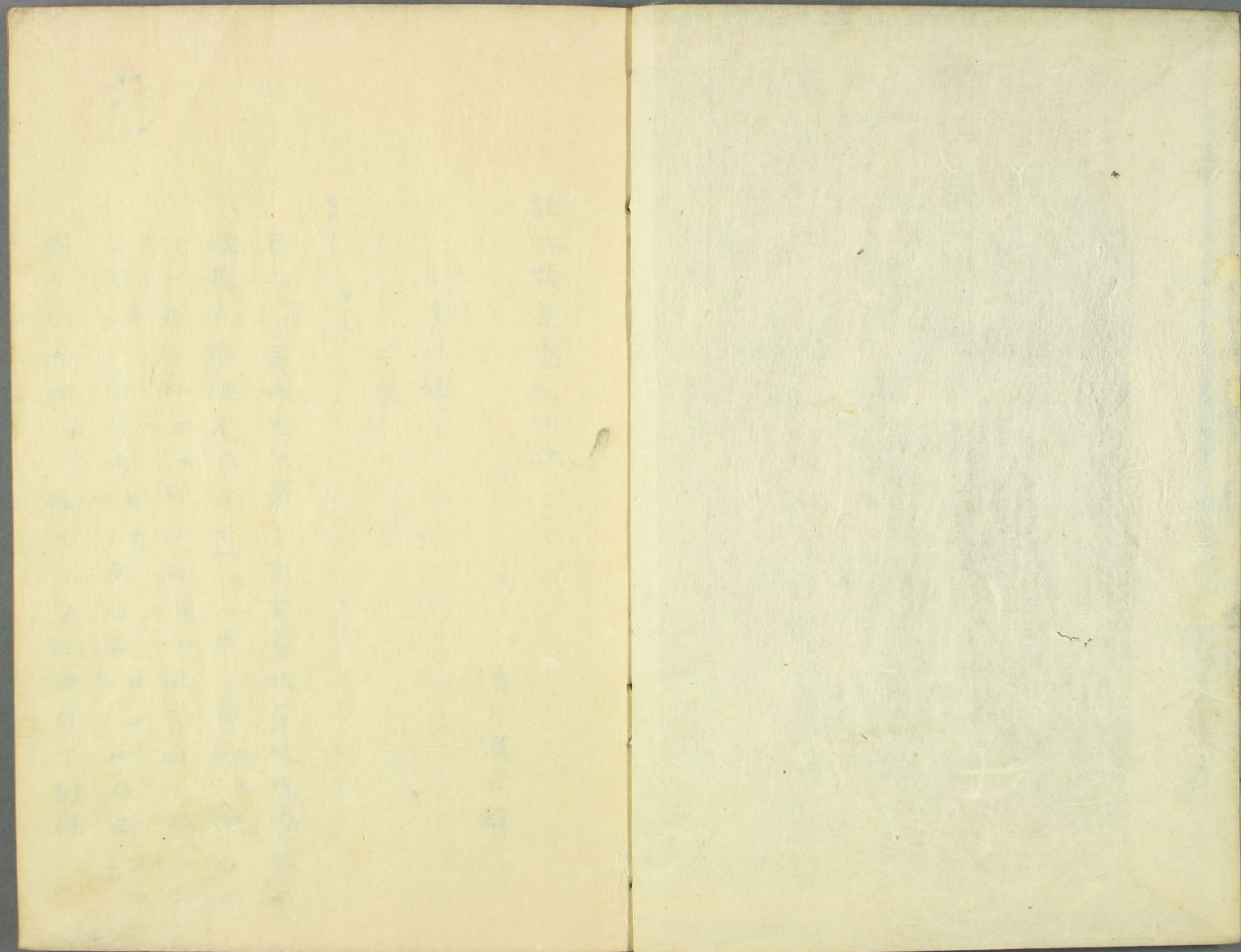
三

ホ 2

502

16





マナハシ
マナハシ
マナハシ

山家下

山家下 山家下 山家下 山家下 山家下 山家下 山家下 山家下 山家下 山家下

清甫尚書記 清甫

ちり花の後のまきも ちり花の後のまきも ちり花の後のまきも ちり花の後のまきも

拾遺貞外

多岐の海一人いりて 多岐の海一人いりて 多岐の海一人いりて 多岐の海一人いりて

同下

長一とも 忍ひをば 長一とも 忍ひをば 長一とも 忍ひをば 長一とも 忍ひをば

拾玉三

かゝられ山のえ かゝられ山のえ かゝられ山のえ かゝられ山のえ かゝられ山のえ

詞苑雜下 行を

いせぬは 梅の花ちり 梅の花ちり 梅の花ちり 梅の花ちり

○ 弟花 月宴 四十五

りたはんの中にも ありはるま ありはるま ありはるま ありはるま

○ 牛取 えんちと 牛取 えんちと 牛取 えんちと 牛取 えんちと

あそ 真麻

ま本七 公朝

さうき 葉に 葉に 葉に 葉に 葉に 葉に 葉に 葉に 葉に 葉に

○

あし 九右

山家下

みさし 山家下 山家下 山家下 山家下 山家下 山家下 山家下 山家下 山家下

あそ 真真カ

雲井の 雲井の 雲井の 雲井の 雲井の 雲井の 雲井の 雲井の 雲井の 雲井の

と 精進 精進 精進 精進 精進 精進 精進 精進 精進 精進

も せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ

吹上

あそ 吹上 吹上 吹上 吹上 吹上 吹上 吹上 吹上 吹上

〇盛衰記十二治承四年正月 中畧 廿日春

宮ノ御袴着御マ十始 安徳帝也 〇今昔廿八 世

魚箸削リ〇同廿六八 眞箸刀ヲ取テ〇元甫集

兵部令ノ親五ノヲ免シテ〇〇〇〇〇〇日

あはれに そはの梅 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇夫木廿三兵部卿親王家召魚味之取哥 法師

〇契冲云初召臭味之取哥僧不可詠元甫集可

後〇

あか 眞字

茶花 ミウ 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

枕冊子 三 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

あに 三 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

はか果

五七 コナ 愛子地 〇催馬樂 我川 〇〇〇〇〇〇〇〇

めはれ コナ 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

おは コナ 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

おと コナ 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

子
ス

海に 海にノ畧

拾遺表 卷上

ふきそを免て草のえあぶ 風は海にうき松のまき 夕影の光

○ 能因法師 続詞苑 倭傳にうき松

○

海 同方也。今ヨリ昔キイヘルマシセ

字部保 うみ くにとくを海人の世にいんをくゆりみ

うくもれー ○ 前ノ字ヲ後人ノ心ニテマ

集多めきけうみうき海人のこの八月に 是モ前ノ

書ヒカ ○ 大和物語 百廿 毛を海くもいかに

おほうりきとえきうみ ○ 海

海 果

兼光 花山 海にえん ○ 大和物語 海ちの小将のも

とら ○ 同海ちの小将

海 乃

拾遺表 卷三

夏草の志はなにか 海ちのけ 海ちのまろ 松たけ 冬ぬん

精舎日記 打そえ 君をうみ 海ちのけ 海ちのくま け 海ちの

拾遺表 卷四 旅人のうみ 海ちのけ 海ちのまろ 人をかきい

一カヤ
一ハハ
一ハハ
一ハハ
一ハハ
一ハハ

○ 瀧 女 女 真井丁の夕暮にのち小調にほろもけさるる

あゝ免とのまゝ 是ハ十四 ○ 同 玉うゝ 清ういほりてむも

あはろえほとそ 女戴ノ娘ノ母 二イフ 詞也

後拾遺四 ナラヌ

あやうとこいゆゑのほろけのまゝほりていふいふ

○ 金葉 哀下 題を以ていふ みるほのいほりてほり

青つら君あそほりうほまゝてりま 拾遺雑哀又

うらひさほりてほりてあをつら君あそほりほりてりま

トアルチ女シカヘテ傳ヘル也

つばらぬのほりていふ人をあまの君あそつきせりいへり

○ 古事記 應神加志能布近 云々 麻呂賀知 日本紀 同

吾カ尊ム天皇ヲ申詞也 ○ 国柄カ天皇ヲ申詞也 ○

三言

はきゑ

竹取 玉をちりはきゑして

全 龍上 補弘 玉うけりていふの浦の貝をけりてはき終にさゆりていふ

○

まげさ

袂衣 二 上 六五 十 ころもぬりていふにほりていふ

てうらさうほいて
 ○ 萩野八百吉云山伏ノカク
 ルケサノ類カス、ケ
 成へシ様ノモテカ
 シト云又勤装同
 弘法大師ノ文ニ麻納僧伽
 ナル事アルヲモテレハマケ
 ヤニヤ弘法大師ノ文ニ麻納僧伽
 名ツケシト云又勤装同
 ヲヨリ名ツケシト云又勤装同
 シヨリ名ツケシト云又勤装同
 ヲヨリ名ツケシト云又勤装同
 ○ 或云麻装ニヤ弘法大師ノ文ニ麻納僧伽
 梨トイフ事アルヲモテレハマケ
 下カス ○
 上ニツクルマシコ
 カケシヨリ名ツケシト云又勤装同

はがら 万却

楞嚴經瞥尔生情万却羅鎖
 拾遺

はすの ばすのいばめあきりお見よその時のささし類さくさく

はきに 本店云^アト云^ニ

落くほ四^セ七 人ハ^ハは^ハに^ハ一^ハマ^ハ○^ハ兼^ハ元^ハ
 ろくおそ^ハは^ハん^ハさ^ハ○^ハ竹^ハ取^ハは^ハき^ハに^ハ世^ハみ^ハま^ハん^ハろ^ハん^ハの
 うけ^ハ玉^ハを^ハり^ハろ^ハろ^ハて^ハあ^ハる^ハん^ハや^ハ○^ハ回^ハ

はき 全

新吉雑下 遍昭
 さかみ^ハの^ハえ^ハに^ハま^ハの^ハし^ハお^ハれ^ハと^ハは^ハき^ハ岩^ハに^ハし^ハく^ハえ^ハる^ハん

○ The Complete Works of the Late Master Jisho

まぶし目

源 柏木

多岐路にありて

はろね

五十二

○万九長分

○同十八長分

○源 東屋

○今

昔廿五十二 袋束モ不鮮ニテ有ケレハ

拾意三

夏子の

同意四

○

十意二

○

はろね 全屋

枕冊子 是ら

拾意四

○

西 言

あきま

志の志祐上 志の志祐上 志の志祐上 志の志祐上 志の志祐上
あきま 志の志祐上 志の志祐上 志の志祐上 志の志祐上

あきま 牧馬

保家女集

あきま 志の志祐上 志の志祐上 志の志祐上 志の志祐上 志の志祐上
あきま 志の志祐上 志の志祐上 志の志祐上 志の志祐上

あきま 巻物

拾玉異本 拾玉異本 拾玉異本 拾玉異本 拾玉異本

もね林の花 志の志祐上 志の志祐上 志の志祐上 志の志祐上
あきま 志の志祐上 志の志祐上 志の志祐上 志の志祐上

あきま

六帖五紅

あきま 志の志祐上 志の志祐上 志の志祐上 志の志祐上 志の志祐上

後拾秋止 良暹法師

あきま 志の志祐上 志の志祐上 志の志祐上 志の志祐上 志の志祐上

○袋草紙 云住吉神主国基良暹カ哥ナ難

シテ云マクリテト云詞ヤハアル良暹云ニ

ほれ衣はくしてめて如何国基云僻事也紅ニハ

マフリテト云アアリ夫ナ書誤也良暹暫按又

フリテ
マクリテ

云風紙の巻をうらむ 綫のをのきそのあきなるはらうに

してト侍ルハ夏モマフリテヲ誤欽ト云国基

閑口

林葉ニ

あはれあまのあまの夕風葉のうらむにちかきあまの

拾玉四世才

同同ハウ

堀百不舎衣 匡房

あはれあまのあまの夕風葉のうらむにちかきあまの

堀後百一

あまのあまの夕風葉のうらむにちかきあまの

丈夫六

あまのあまの夕風葉のうらむにちかきあまの

讀岐集

あまのあまの夕風葉のうらむにちかきあまの

○

海けろく 輸物

カキワサ
ニケカタ

三代実録仁和元年十月廿三日甲戌天皇御紫

震殿右近衛右衛門右兵衛三府 并 右馬寮献物

是去五月六日武徳殿前競走馬之輸物也 拾

遺雜秋 天禄四年五月廿一日圓融院のみ

品高に渡せりてうんまにせりし海けろくを七月

七日甲子 同 右大臣澄光の家に前裁合し付

了海けろくをうらむ橋のしけろくし付りし

○顯昭拾遺抄注勝負ノ一ニハ勝口サ頁ワサ
トテスル也

後拾誂諧

頁々ヨメ石川うけ解 形影をうへまほしうせしる水

○

海きつら

万代雜三

家隆

うけ浪の多命の漢の海きつら地に至る松の根をまき解き

海きつら

源 孫合

いかに海きつら海きつら海きつら海きつら海きつら

あをくらふ解つてはつる○弄つては先まゝ○竹

取すのうにをく人もまゝいふと海きつら○大鏡

一三糸 海きつらもやせまゝ○

まを

田丈ニヨミナセシハ後世也

全雜上田家先翁

海きを山田の彦にむみりうまう柱にあんとし

子載

海くらら

町口

大鏡一 花山 具家ハ土御門海くらら海くらら海くらら

りり○

海らとどきし

後拾春上 兼卷

○ 花みもと家路にあそくさしあはれきさしと妹をいふ

○

海らとどきし

待遠

後撰

○ 枕冊子十廿八 待遠にふしこころ

枕冊子十廿八(巻) ○ 待遠にふしこころ

海らとどきし

都土産松のちるふれと うきあはれを飾りあつたまはる

さしとふしあはれと

同 いんぐわい

末の松は海らとどきしきあはれを飾りあつたまはる

同返 宗久

浪ちさる袖さめれぬまはれしまのさうたはれまはる

○

海らとどきし

間使

万

壬ニ中セ六

庭におゆるされ二十年のまらひのあはれきさしと妹をいふ

○ コノノ 訛ニハ松カ

ましてうゝ

士二集下

いせは海のおほのすてくはてをそくうふにぬよのまきぬく
夫木世五海人 御集 女御徽子内親王
ゆてくみあまのきついでにほきつうにむらぬきく

○ 夫木世五海人部 セそそ 考 ○ 六百番判詞同頭昭
陳状 ○ 倅業状 ○

はかちる 眼皮

和名 ○ 枕冊子三九 さつきいそみ

免もくろくはるかちる解もく多て ○ 遊仙窟

○ 源 柏木 はるかちるのよみそつゝきすはも ○

はとりめ 守目

後拾遺三おほさけきふく免てはとりめ解とつひさき

まひて

はるかちる 五言

万代雜四 為家

そしにのささけ床のまらふにきのねきおもあはせけ
○ 続世継 梅の木のもと
あぢの清きはりのほく解もはる

ふりあて〇

五言

はかりぬる 是れを助辞に之り

十神 是れち祢豆にはかりぬる〇拾遺哀傷 中納言
敦忠はかりぬる〇同 同 右兵衛のうら
はかりぬるにらむ

はかりぬる 枕上

金葉雜上 枕上 是れを人の多ちて〇保憲女集ま

はかりぬるにらむ 是れを人の多ちて〇同
下 枕上 是れを人の多ちて〇枕冊子 世に枕
上のうらに 中畧 枕上 是れを〇

はかりぬる 枕箱

拾遺雜笑 是れ朝臣法師に 〇枕箱をよにうら
はかりぬる〇

はかりぬる 町足駄

拾玉四 是れは町足駄をうらぬる〇

あらくあ

拾玉四

○ 町くきりきりほひりてをを及れ... ちりりきりり

○

まわりまの 食物

源 玉うつ 海あり地ねく... ころりて○菜花

まよまゆ

そはあかりまの侍厨子... にま... ○

○

まゆをぬく

海人藻女云彼御取 鳥羽 己前川男眉の毛をぬき

髪をぬきみ金をつらま... 一切を及未代毎度矯飾

のま... ○取... 物語はゆき... 襦つけぬをぬき

ま... ぬき... ぬき... ○志のま... 上はゆきの跡

もぬく... ぬき... ○東鑑四十九 十八

御眉墨御眉造○枕冊子 地のあ... ぬき

コレモ女ニ
イヘルナリ○

あらくあ 圓頭○法師ヲ云

マニノアリ
眉墨
眉造

清らあけけ

拾遺三

古今人系

曾母集

清らあけけの君と世にこそうつき。○小侍後集正月
清らあけけの君と世にこそうつき。○小侍後集正月
清らあけけの君と世にこそうつき。○小侍後集正月

○小町集

長分

し小大君集

○枕冊子

草、清らあけけ

蜻蛉日記

あそびの君と世にこそうつき。○小侍後集正月
あそびの君と世にこそうつき。○小侍後集正月
あそびの君と世にこそうつき。○小侍後集正月

○

六言

清らあけけの君

諸君

宇都保

いづみ

具四の帝后清らあけけの君にけを一つ

○源 桐臺

右左衛門

女御清らあけけの君にけを一つ

清らあけけの君と世にこそうつき。○小侍後集正月

七日中まの清らあけけの君と世にこそうつき。○小侍後集正月

清らあけけの君と世にこそうつき。○小侍後集正月

清らあけけ

食物のムサノツノモ。世ムサホルキミホルト
云ナリ

宇都保

後系系

清らあけけの君と世にこそうつき。○小侍後集正月

日記あるは海に人々を免れん。

海に人々を免れん。

弟花 月宴 十六

海川のうそ水 松聖

万代秋上 九多博持定嗣
蟬 ちりしりのうそ水 免れん

海川のうそ水

主二集下等松聖
しんねんまの煙もききよの海にきえぬ 袖もあはれぬ

同善山恋
あしきまの煙の夕まにわを免れんそしねのあはれ

○ 続詞苑 阿波西司彼西の異銘に山下松煙とて
銀をつらりり免れん白を免れん 良暹法師

君う代み多しそしき山恋のまの煙いつまも

○ 八雲御杖異名部

○ 続詞苑人のせそよしきり返りにゆきききき

のついに糸めて書してまうりれか返して松の煙の
免れんあはれんをん返りに 玄範聖人

よその免の紅海くえりし糸をそ免つうけしん

○ 著聞三 後白河院熊野詣に後代の客に川う歩

おとーゆきりくくに国司松燈をつつて伊弉にあり
きりりり 中畧
しきりいうはるめり。

ゆりのちほり 松氷

千代^{つはらみ}のまのあきとらけかきめり

ゆりの葉風

続詞花旅 俊和

散木
いさよのききつゆにききつて松のく風母きを

六百番 顯昭

ゆりのそら

白氏集 五架三間新草堂石階松柱竹編牆

新古雜中 式子内親王
今いこれ松のそらに移の房にききよをききふき袖

ゆりしきよ 未詳

中務内侍日記 せは
ゆりしきよみほききりり

ての同 せは

十言

あはれまき

渡 玉く 渡下 多きし ひとく ぬきし 〇同 あけ

あはれまき

あはれまき

散木七意上

為后百

親隆

あはれまき 大なるのこも けいこく ころして きく ころころの

ミ、キクル

あはれまき

万代意一山家意

山家のあはれまき けいこく あはれまき けいこく けいこく

為后百 為忠

山風にあはれまき 上多し けいこく けいこく けいこく

〇

あはれまき

體源抄云 参 音声 樂春 春庭 樂夏 應天 樂秋 万歳

樂冬 万秋 樂賀王恩 太上天皇 御賀用之最涼列

内宴用之 涉河鳥同上 臣下 御賀 万秋 樂鳥向樂

再 太平 樂芝雲 樂高麗 顔序 退出 音声 長菱子

あはれまき 音声 船樂

通還城樂行幸還御用之夜半樂美和御取宗明
 樂御願供養上海青樂南池院船越天樂急高麗
 新蘇利古放生會御樂常武樂前同○中務内侍日
 記廿日秋ハホトに^〇記^〇つろい^〇多^〇伊^〇ふ^〇れ^〇か^〇そ^〇
 弟^〇元^〇 舟の^〇か^〇き^〇に^〇ま^〇る^〇こ^〇し^〇お^〇も^〇ろ^〇〇

海をのみい系 真青新系又マワホノ約カ
万代秋上 師光
 相模に海をのみい系引つけし^〇と^〇ま^〇え^〇る^〇星^〇合^〇の^〇そ^〇

十一言

雲の赤に杖をつうせ

赤深三 その世にゆてー みらに さゆり き 家 は 雲
 の赤につうせをつうせ き し
 云に き 家 は 雲 の 杖 つ き り

みみの如

二言

みふ 御封

糸花

又そゆま

○ 源 女 女

伊多うまのうらふかき

○

御給年官年爵

三言

みか免 見醒

庭のをしーいかにさるみか免せぬすーいかにぬ ○ 源

子初

家解しーいかにさるみか免せぬすーいかにぬ ○ 源

ミ 水

拾遺草上

秋多んしゆを同をりしとミ 子に侍るし 馬の意

万代夏

仲夏

主上 七七

しんけ 馬のさあひのあしし けり麻須香井衣みし

ミ 水

ミ 御修法

兼花 廿二 七壇の侍修法長日の侍修法 〇紫日記

又壇の侍修法 〇兼花 十三 長日 〇源氏

七壇の 長日の 五壇の

ミ 御厨子 〇下ノ女房ナリ

枕冊子 十 〇その次に 〇

同 〇 〇

ミ

日記 〇

ミ 御厨

兼花 五月 〇同 〇

の侍馬のありけり 〇源 〇

き上馬を○小馬命婦集之浦の志に入りに

くはよあけりあの中をさしあられのしるしを

○同之浦のあけりあの中をさしあられのしるしを

みづの 見物

兼光 川宴 免つゝはるみづの○

四言

みづの 水分○水配

古事記云次天之水分神次国之水分神 訓分云 久麻理

みづの

五七 水沓山をみまへうれし

回魚ニツワケトアル誤也 ○枕冊子

六帖 ○王蓮十二詳説

月詰ニ 経盛

夕ラ 夕多のいし物 身隠

六帖同

千巻一 基俊

又あきにいそふまの若草志のふとまはもあせしうれ 堀百彦 取仲

みづの

夫木六回

○ 此哥 万二水傳

新六ツ一 衣笠
うつこの花はのつー 咲ーきーあはれんく火ーあはれん

みゆゆり 三結実

中務日記 三ゆゆりあはれぬのあはれぬあはれぬあはれぬ

みゆゆり

曾丹集 四月中
みゆゆりあはれぬのあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ
新六春田

みのろし 表草の表につくろのまゆしあはれぬ
佐部

赤深集 一ゆゆりあはれぬのあはれぬあはれぬあはれぬ
あはれぬ

○
あはれぬあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ

みゆゆり 早癖

挾衣 二上 四 十
あはれぬあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ
あはれぬあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ

ちをあら〜ま〜に涉形とし書り ○保寧女集 文

〜月を〜ま〜に枕冊子 九十六巻中みあれ

あまのせんト 人名也此人今昔ニ見エ タリ新古今雜上ノ作者也

山家集下 思つ〜みあれの忘久に〜のうらみも〜解〜

○みあま山 五代神祇若水 ○拾苴抄下 未 御阿礼

限賀茂一社 ○新古神祇みあま山 加季談四月

拾玉異本 年々〜あま〜 かよめみあままうけてを神の〜

宝治百首 首裝 思〜みあれの〜 宝治百首 首裝 神の〜

丈木七

丈木七 行家

みあま川と〜 六帖ニ あまの〜

六帖ニ あまの〜 あまの〜

○丈木七 下同

丈木八 慈法

時を〜あまの〜 源道濟集

源道濟集 あまの〜 あまの〜

為忠百首 為業 思〜みあれの〜 あまの〜

丈木世三 公朝 思〜みあれの〜 あまの〜

○

みあま

八雲みよしの山 大中女将異名

○後撰雜一云兼輔朝

臣宰相中将より中納言に降ると又の年の暮らぬと
多らぬあはれに降りてたまはれ思ひをのぼつと

兼輔朝臣

みよしの山にほほれとあはれに降りてたまはれ

○顯注密勅 いふに野中の清多の系 云之筆山を近傍と

いふに古事談お枕子 もる葉古々にも丹文に

もる葉古々にも丹文に いふに野中の清多の系

やま ○拾遺雜賀 ○月詣九雜下 ○後拾雜二

和泉 式部 ○続古賀 後鳥羽院 ○後撰三女将実卷

みよしの山にほほれとあはれに降りてたまはれ
にほほれとあはれに降りてたまはれ

そらぬるにほほれとあはれに降りてたまはれ

○ 後撰三女将実卷

みよしの山 拾遺三卷上

みよしの山にほほれとあはれに降りてたまはれ

○掃部式 下 御川水神春秋祭料 ○

みよしの山 御楽長

山家下放生寺
又さしつゝあまのついでに
○

○

みまのさし
田室守

後拾遺
家集同

壬二集中五六
時多のさしつゝあまのついでに
○

みちのく
其道の人

ささの福さる
○

事にあまのついでに
○

みまのさし
火災

天武紀上
十日々夜々
火^{アツカシ}處多
同下
失^{アツ}

火^{ナカシ}○玉のついでに
十一
安元三年四月廿八日の
火災に○

みまのさし
三途

源松尾
あやき
道のついでに
一時に
河海經

云果報若盡還墮三途
○地獄餓鬼畜生
花鳥
○

又新く

新詞 優倫

あらしの雲もよほさずのよきとてあはれにあらはれし

○

みにか

ついで問答序いそふあう車に多らけりし

みのか

続詞 花下 和泉守 於

移りぬけしをうらなひのまをじし

○ 主君の御文をよみしに

みにか

紫集の巻の一日うらなひに

師のうらなひをうらなひし

神女かたのうらなひし

○ 渡りし 同 横笛

そらつらつらして 女御の君にまかり

あはれしをうらなひし

みにか

みや免らるる

中務内侍日記

うけくにまゝつてみや免らるる

○丈夫廿三 光俊

ゆふれをの 左注け分り康元々年

十一月五日鹿嶋社詣り次みや免らるる

六言

みやあかり 御燈文

源 玉う みやあかり 文解と書多るん 花鳥

部王記延長八年八月作願文送祈長谷寺観音

願脚病平愈将造白檀観音像及奉鏡一面灯明

十万灯

みやうらやう

御厨人。女官ノ賤ニキ也

延喜式

○兼師集 みやうらやう わをとり

みやうらやう みやうらやう ○源 須テ みやうらやう

○枕冊子 四 みやうらやう みやうらやう ○同

十三 みやうらやう みやうらやう みやうらやう

みやうらやう みやうらやう ○

みら〜まは〜

宇都保 後系君

七月七日に解る等尾川に泳ぐ〜まは〜

しにちまきりり免きりて〇志のむ祿上みら〜まは〜し
つま〜いとあほき、泳ぐあそびに引き祿...
ちあ〜い〜し

みら〜まは〜 御庄御牧

源 復テ〇同 治虫 〇大和物歌 ち〜咽〜の泳庄物
にあほ〜し〜みら〜まは〜〇

みら〜のりら 三品色。藤

隆信集下四十九

〇 ち〜ち〜花の白しにちまき、か〜し〜ぬ〜ま〜の〜
〇

みら〜まは〜

カ

〇 都土産 ち〜ち〜に〜も〜く〜ん〜も〜祿〜ん〜ぬ〜き〜
結〜し〜る〜〇 小鳴口早〜ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜
ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜

みつきのあき

今俗麻ヲ水ニ漬スヲミヅノト云同義カ

万代巻三 中御手長方

○ 綾ノ糸ニミヅノアキヲシテミヅノアキト云同義カ

○

みつーあき

未詳恐誤字

第花根命

○ 綾ノ糸ニミヅノアキヲシテミヅノアキト云同義カ

ミヅノアキ ○

みつふのあき

枕冊子

○ 中務内侍日記

太神宮儀式帳

○ 中務内侍日記

新六 ミヅノアキ

○ 盛衰記世一公御殿上人近衛宮御繩女ノ未

ニ至ルマテ先タルモ若モ皆甲冑ヲ著シ弓箭

ヲ帯ノ打立ケリ ○ 延喜式綱丁

○ 安斎云大舍人助也百寮訓要拵に大舍人寮

行幸の時御細作ト云フミヅノアキト云同義カ

御細作ト云フ ○

みゆい草

イツマテ草ト同物カ伊勢了考合

壬二集上

みゆい草

○

みゆい馬

みゆい馬 唐國より渡りし馬のり

と

みゆい草

印 漂 渡

万代秋上 中系師光

みゆい草

言

みゆい草

源 紅葉

みゆい草

みゆい草

みゆい草

万代表三

頭字

みゆい草

又のーろちろも

後撰春上

万代雑五

列

保憲女集

袋中子

よのれて... 依カ

僧ノ 差ニ異体ノスカタニモミエケル

山ノ... 新十

新十

又のつねね 病

隆信集下

思入... 雪か

○

又のーろちろも

拾玉五

新六... 衣の

夫木乾

夫木乾

同同 寂蓮

都ノタツミ
都ノミナミ

新吉賀 抄改太政大臣
六百番 分合四

古今

古今

万代意四 抄改
古今

○

八言

ミクハのちきり

後拾部 三月之日、北のちきり、三日、北のちきり

とて、
後系、方朝臣

ミクハのちきり

○家集○文徳紀一

九言

ミクハのちきり

ミクハノ冠、熊ノ恐、口ニトツ、ケレセ

散木七意上
ミクハのちきり

ハムクミノオロロシ

十言

みづはらをきつる

瀬 須 六

十一言

みつきあてそ〜

第花 初花 五才 四五月 ○ 同 同 三月 ○ 同 四月 宴 五才 十一 子 につきに

ゆれ 事此き〜 女御 ○ 同 浦の別

之月をかりあて〜 出さるる ○ 同 世 花 山 之月あて妻

して出給えんと〜 性子 ○ 同 同 詮子 ○ 瀬 若

下 川の月をかりに〜 ぬきま〜 神をぬきた〜 つけ

おえ〜 ま〜 〇

みづのえの〜

新古雑中 三位季能

多れえの〜 の〜 神を〜 ぬきま〜

続後拾春上 謙余太大臣

鈴鹿 多れえの〜 ぬきま〜

新後撰秋下

神代を〜

○ 契沖云 丹後熊野郡熊能神社を能に

ま〜 本居氏云 ちやゆりぬ〜 けちろの〜

〜 本居氏云 ちやゆりぬ〜 けちろの〜

〜 本居氏云 ちやゆりぬ〜 けちろの〜

夫木六 鎌倉右左衛門

又しし程あつしそ 及びる今のの ちり 云々 梅のそり元

○

十二言

みそらあはしり しのらうし

拾玉四 観音品以種々形遊諸国王

之十あはしり ともらひぬ 塔きり 塔きり 塔きり 塔きり 塔きり

○

むの初

二言 今昔

い 棕

異本拾玉禁中

あはしり 人あはしり 人あはしり (あはしり) (あはしり) (あはしり)

○

いけ

枕冊子三十一才

ち之君とほつあはしりの神くけし いけめをまぬのちり ちり ちり

拾遺物名 ちり ちり ちり

とほしり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

○ 僻業 杖いけとを 詞身にを 祐と 隠題の けい ちり

しんまもあまのこゝろよあまのこゝろよ
けみまもこゝろよあまのこゝろよ
けみまもこゝろよあまのこゝろよ

しん 無期 河

源 柏木 係 山崎にひくとつてさきうまをさくさき

しん 同 舟 係 山崎にひくとつてさきうまをさくさき

しん 大和物語 といふことありりれと

しん 讃岐日記 といふことありりれと

しん 今昔廿七十九

しん 宗

しん 宗

山家下 家の風しんをうへき木のもとにたらしめんと
しん 同 神は月をまもるれあまのこゝろよあまのこゝろよ

○

しん 果

しん 後拾遺一 ○ 師 堀百麻 玉の村

しん 同 師 堀百麻 玉の村

○ 同 師 堀百麻 玉の村

はともを○同一に兼し兼ぬあまのこゝろよ

しん スキ
しん キノ
しん キ

〇 一 一 萩

新古 萩 四

三言

いーい

土佐日記

〇 大和物語 萩 〇

くーい 〇 宇部 萩

いーん 無心

源 玉

いーい 〇 萩

いーや 虫屋

続千神祇 虫屋をつくすてか大納言 資季のむとて

新六虫 光俊 〇 萩 〇 萩

〇

いーあ

小馬命婦集

きりーい 〇 萩 〇 萩

席ニ 萩 〇

いとく

枕冊子 いとく

よはいのまけしうろて〇源 廿サ

いとよけちさき 梅 〇同 梅枝 いとく

〇河無徳〇源 廿川 〇人じとみゆー多免きまは

かりて〇同 蓬生 中門水とすてうもぬくぬけて入多た

つけても 細 〇西向き 書 〇 カシ

タノナイツマラマ 譯 〇源 常文 〇 カシ

スヘキカムゴキトモ 櫛 〇 行集 〇 カシ

水 〇 枕冊子

〇 枕冊子

遠きあき 〇 縁 〇 文

〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇

〇

いさひ

堀百鬼 後

〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇

いづか 村濃

後拾秋下 堀河右大臣
今上にまゝらぬれしてちの川にちたにまゝの系

四言

いづか

古今

○難太平記下只斤腹痛キ昔心テテ
ムカシヨロ
いづかいの様かぬれぬれまゝの多むしきか

ムカシ
ムカシオ
ムカシメ
ムカシウ
ムカシビ

○愚管抄五六の人昔人のみちをく敵多に
あふりりきん ○今昔十九十七御筆ヲ千扣ニ遊
ハシケル程ニ此ク人々ノ参リタリケレハ昔
マキテ表ニナム思サレケル ○源蓬生侍帳と
もい古代みぬきまゝいづかみてうまきき
名のを祿上まゝのいづかまゝあま昔様 ○

いづか火

河向燒 日本紀 ○源竹川
いづか火つくまゝ ○花
まのつきまゝにまぬれみ又火を

つらまゝといふ火の必消るをいふ火にふその如く人の
腹をまきくおろしぬ又腹を多てかきまき人のをまき
ていへ。○要笈抄七もまゝをまきまゝをいへて
をいへて朝家をおしふまゝをまきまゝをいへて○

いふ湯

宇都保 あしゑ 但多日防ノ末ニ錯入 歩山之湯内侍のまけの
おろしふまゝをいへて○ 湯ナイヘリ ○ 湯上 着茶 東家此室
有ぬるあしゑのまけつらまゝをいへて歩山之湯にありまゝをいへ
るもいへてまゝをいへて○ 河委注可考。○ 花延長四年

六月一日皇后産長見 村上天皇 内侍奉仕御湯

大君前湯 ○ 細く湯之 ○ 宇都保 後園 歩山
ろのま君此歩山湯にはまゝをいへて○ ムカヘ湯トニ
人ムカヒ居テナムスル意カ 即初湯ニテニ
花鳥 = 前湯トアル具意カ

いふ湯

○ カセ 麗籠 野ブスママヨノルナラニ
又いふ湯はあつたにまゝをいへていへていへていへていへて
いへていへていへていへていへていへていへていへて

いふ湯

小嶋口号 山寺にほつきありききり 石止り

せきり。

いしけら 虫

宇部保 うり ころほういーりとも。

虫の名

環中納言 いし 免了 姫若 ちのちる。いぬきち。いぬきち。

あはまおれをつけて免了。

いし

拾遺雜記 うしれ本 中し 免了 ちのちる。いぬきち。

いし

兼花 後悔大将 山いし ちのちる。いぬきち。

いし

宇部保 吹上 いし 免了 ちのちる。いぬきち。和名 漢

父一名 漢前 无良 岐美

○ 五月蟬声送麦秋

虫掃虫干

ムシホシ

古光口實傳常明寺勤役車一切經虫掃
無定日
禪宜寺
僧等勤仕
之七月中
○

いしきせし

コシラヘル也
○タ、糸ナトニヨラスミテ物
チツクルナムスフト云
庵ナムスフノムスフ
モタ、ツク
○花ハミミ
波部
ルナナリ

後拾遺雜四
〳〳〳
中の子曰
〳〳〳
〳〳〳
友多ら

吾人のもとより
〳〳〳
〳〳〳
〳〳〳

馬内侍

〳〳〳
〳〳〳
〳〳〳
〳〳〳

〳〳〳
〳〳〳
〳〳〳
〳〳〳

〳〳〳
〳〳〳
〳〳〳
〳〳〳

〳〳〳
〳〳〳
〳〳〳
〳〳〳

〳〳〳
〳〳〳
〳〳〳
〳〳〳

いしき花

続古叙教弘
長え年
六月
龜山の仙洞
如法写經

竹一時十種供養の散花位一位皇子調へし
入道お太政大臣

しんぎをまらりしと解し法の花らりてあはれ新にこそ

○宇都保 国譲 東まら白う祐しんぎの物もあはれむらして

ほろ解多のりしと解し法の花らりてあはれ新にこそ

くろのちりしと解し法の花らりてあはれ新にこそ

さそひし○同 花同 そよまらにしんぎの物もあはれむらして

多り○成通卿家集皇嘉門院に女房共供花以

百種花供佛可被奉訪北政所菩提壇其中或女房

云献結花之日欲相具和歌一首可終作讀之

そらけをたゆみしをまらしと解し法の花らりてあはれ新にこそ

○増鏡 相のまら 兵衛佐親朝しんぎの物もあはれむらして

あまのいしと解し法の花らりてあはれ新にこそ

梅枝をそれしと解し法の花らりてあはれ新にこそ

あはれ川 花山院お将多しんぎの物もあはれむらして

ぬ○新抄雜一高倉院佛時後つほの紅葉ゆかり

ききしと解し法の花らりてあはれ新にこそ

吹風も 枝のりしと解し法の花らりてあはれ新にこそ

○続拾雜 下藻壁門院かきと解し法の花らりてあはれ新にこそ

み目人細云通方しんぎの物もあはれむらして

建礼門院
右系を

六の花雪

韓詩外傳云凡草木花多五出雪花独六出○

己の車 棧車○空車

賴政集 返迎車哀

のせしうあふくくさちきし物きくもうの己の車はさ車

○宇部保 後系石 己の車にこそ一はつてきてききり

○うけろふ日記 己の車川つけてあや一き木あうあう

ていそきき中よりあふ○宇治拾遺十三巻にうやう

はそききくもあふくさき事いとはとさきれ

具きいさうあふ下へして己の車かたにさあてつておんと

○枕冊子 己の車よ 月めいとあうきにやういさき車に

あひさき トヲルナ 月めあうきに己の車あき トヲルナ

にのりあうく 又 月杪に己の車あうき トヲルナ

出 トヲルナ ○ 此聖人雑役ノ空車ヲ持テ トヲルナ

此牛ヲ得テ喜テ車ニ懸テ寺ノ修造ノ料ノ棧

木ヲ令引ム

拾遺物名 己の車

己の車

ム子ヒシケ
ム子ノオキヤ
クサワク
ム子ツブク

赤染集 けちやくけりてふいおちしき返りてをひねりて

ふせ移く

ひねりけりてあましありあはくちりしきゆとて

〇渡 徳角 けりてあましと胸もけりてあはれ也 〇同

権 〇同 野分 〇同 野分 〇同 野分

解 けりてあまし

六言

いーうーうー

弟元 浅録 殿めつくりさしあはれあまし

そぬーうーうーあましけりてうらあましとあはれ

〇同 〇同 〇同 〇同 〇同 〇同

いーうーうー

八雲御杖 通後ひくあはれにうらあまし

いーうーうー

ふけのひねりきこひあはれにうらあまし

新六 衣笠

あましあましあましあましあましあましあまし

丈夫装草 三位季能々

○拾葉云蛇ノキヌヌキタルヲ虫ノ垂緒ト云

ナリ○

いそぎふら

宇部保^上吹^上 さまにいそぎを貸みかしらまゆいそぎも

免て さまつきてくふしてを^{いそぎ}つきて ○糸花^珠

伊はら^{いそぎ}にけけ^{いそぎ}にけ^{いそぎ}も^{いそぎ}いそぎふら^{いそぎ}めて

つら^{いそぎ}に^{いそぎ}つけて○拾遺雜上^能 ぬく^{いそぎ}つら^{いそぎ}

人のしとみぬきをいそぎに^{いそぎ}もて^{いそぎ}を^{いそぎ}いそぎ^{いそぎ}○著

聞十一画 罔麗景殿繪名 右ノ秘のさき筆にんそ

いそぎ^祓のいそぎを^{いそぎ}いそぎ^{いそぎ}に^{いそぎ}いそぎ^{いそぎ}を^{いそぎ}いそぎ^{いそぎ}

いそぎ^祓の繪合模本^{いそぎ}いそぎ^{いそぎ}不^{いそぎ}調^{いそぎ}大き^{いそぎ}に^{いそぎ}いそぎ^{いそぎ}

いそぎの神

和名産靈^{ハスヒノカミ}

拾雜^祓君^{いそぎ}いそぎ^{いそぎ}いそぎ^{いそぎ}いそぎ^{いそぎ}いそぎ^{いそぎ}いそぎ^{いそぎ}

詞^能いそぎ^能いそぎ^能いそぎ^能いそぎ^能いそぎ^能いそぎ^能いそぎ^能

いそぎ^能いそぎ^能いそぎ^能いそぎ^能いそぎ^能いそぎ^能いそぎ^能

○取う^能いそぎ^能いそぎ^能いそぎ^能いそぎ^能いそぎ^能いそぎ^能いそぎ^能

いそぎ^能の袂衣ニいそぎ^能の神^能いそぎ^能いそぎ^能いそぎ^能いそぎ^能いそぎ^能

正のしき子孫

後拾雜四 後三条院

位々の神の養を 思ふらん正のしき船をうけてきまはれ

○兼光 松の木のえ 〇後頼口傳同 〇契云院をひふし

き船にすまへし君の舟且多船に舟母若舟りまへ煩

舟きり如く位をさへまへし舟のうらき成る〇

十言

正の葉のしき

長明無名掛上出れしくのとみうきして果あつて

しつふか〇兼光 疑 〇さしくのとみうきして果あつて

てしつふか〇兼光 疑 〇さしくのとみうきして果あつて

正のしきのしき 睦語

源 女 女 あはれしつふか〇兼光 疑 〇さしくのとみうきして果あつて

源 西 〇源 下 若菜 又人もまき

源 中 の しつふか〇兼光 疑 〇さしくのとみうきして果あつて

長明家集 源の男のしつふか〇兼光 疑 〇さしくのとみうきして果あつて

〇

ムツカタリ

むさめはく

月詣集

小侍後集

ひききめらる

拾遺負外下 韻字題詩句妓樓花綻映紅錦樵
往蕨生踏紫塵。下學集可考。

ひらめくせ

波部己出

采花根合

山田はくらにありてはくせ

ムロノカリタ

六帖 一巻

きのくめのひらめくせ

千秋下 源兼昌

家門のおくせ

十言

ひききめらる

尚書會記 ひききめらる

十六言

紫式部地獄に

宝物集四マナカタハ紫式部カ虚言ヲ以テ源
氏物語ヲ造リタル罪ニヨリテ地獄ニ墮テ苦
患忍ヒカタキ故ニ早ク源氏物語ヲ破リ捨テ
一日經ヲ書テ暗ヘシト人ノ夢ニ見エタリケ
ルトテ哥讀共寄合テ一日經書ヲ供養シケル
ハ覺エ給フラニ物ヲ〇今物語云或人の夢に其
正仰もぬき物らけのやゆりえりをもあきけり人を
とるの祓りきく世を教へそとをのちあはくしあ
つるて人の心をばしとるに地獄母あちて苦をうけ
事いと多くしり源氏の物語の名をきくとあもあ

多佛といふ家を巻毎にくまをばしてむらゝし
ふもまといひりれいさうにまじりまかると
桐葉にほさるんやもころりあもあまの佛とたにそれん
とそりまらる〇新勅叙教紫式部多るとして猪姫經供
養し付る所に藥草喻品を送り付る
権大納言宗家

隆信集

万代

月詰

1

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. The handwriting is somewhat faded and difficult to decipher, but appears to be a continuous block of text. There are some faint markings and a diagonal crease or fold on the right side of the page.

2

